九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『大和物語』の「けむ」をめぐって

伊佐山，潤子
鹿児島女子短期大学講師

https://doi.org/10.15017/15482

出版情報：文獻探究. 23, pp.1-9, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『大和物語』の「けむ」をめぐって

伊佐山潤子

はじめに

いわゆる過去推量の助動詞「けむ」が物語の地の文に用いられたとき一種特別の表現効果をもたらすことについて、甲斐睦朗氏は『源氏物語』若紫巻の源氏と藤壷の逢瀬の場面の「いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおぼえぬぞわびしきや。」の注釈で、次のように述べておられる（注1）。

光源氏の強引な依頼に根負けした王命婦は綿密な計略を用いて光源氏の手引をする。ところが、その計略がうまくいったのに語り手が突然、「いかがたばかりけむ」というように、現実の物語る場に立ち戻って、古い昔の出来事だからはっきりしないとおぼめくのである。語り手が王命婦のところにいなかったから、どういう計画を立てたのか知らないとしてもよい。光源氏とその義母藤壷の宮が密かに逢うという大胆な設定であるから語り手が逃げを打ったのであろう、そしてそのことがまた物語に遠近を設けることになる。この手法の「けむ」は源氏物語によく用いられているが、先行する伊勢物語が常套的に用いていたものである。

さらに続けて、甲斐氏は『伊勢物語』第二段の「かのまめ男、うち物語らいて、かへりきて、いかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そほふるにやりける。」を引いて、

伊勢物語の語り手が突然主人公から離れて、その心中が分からないとすることで、この物語に空間的時間的な奥行きが設けられることになる。・・（中略）・・対象人物の気持は、もとより語り手には分からないことである。しかし、「いかが思ひけん」の場合は、語り手が即している主人公の心中であるから「けむ」で表現するのは異例な表現ということになる。

とも記しておられる。

語り手が事細かに述べようと思えばいくらでも細かく詳しく述べられるところを、あえて、「いかがたばかりけむ」「いかが思ひけむ」とすることで、『源氏』の場合、読者は一気に密会のクライマックスの部分へ導かれ、なおかつ王命婦の手引きのあれこれを想像する楽しみも与えられるし、『伊勢』の場合は男の恋情の深さをしみじみかみしめるように仕向けられる。これを甲斐氏は物語に「奥行きが設けられる」と言われたのであろう。

「けむ」は普通過去推量の助動詞と呼ばれている通り、過去のことを推量する場合に用いられるものであるが、先の例のように、これが物語の地の文に使われると、物語中のあることすなわち過去のことについて、語り手が物語に突然割り込んできて、直接その肉声で推量するという形になる。従って、読者はここを読むとき、物語（過去）の世界から今まさに物語を読みつつある現在の時点に引き戻され、そこで語り手の声を聞き、さらには語り手の推量に触発されて自らもまたあれこれ思い巡らせてみるということになるのである。『源氏』の「けむ」の例はなるほどその最たるもので、「語り手が逃げを打った」分だけ読者は想像する余地を大幅に与えられ、語り手の代りに物語を紡いでみることも可能で、そのことによって読者はあらためて物語の世界に、前よりさらに深く引き込まれていくわけである。この点で、地の文（注2）の「けむ」は、語り手と物語の世界と読者と、この三者を緊密に結びつける効果をもった用語ということができるだろう。

したがって、「けむ」が物語のなかでどのように用いられているかを調べてみることによって、物語に対する、あるいは読者に対する語り手の姿勢を明らかにすることができるのではないかと考えられる。そこで本稿では一般に『伊勢物語』と並び称されることの多い『大和物語』について、「けむ」の問題をこの両者を比較しながら考えてみたいと思う。（注3）

一

さて、『大和物語』の地の文には以下に示す通り二二例の「けむ」が見られる。

1　その物急ぎたまひける時は、まもなく、これよりもかれよりも、いひかはしたまひけるを、それよりのちは、そのこととやなかりけむ、消息もいはで・・・（三　272－3）

2　男、女、あひ知りて年経にけるを、いささかなることによりてはなれにけれど、あくとしもなくてやみにしかばにやありけむ、男もあはれと思ひけり。（七　275－5）

3　御返し、これにや劣りけむ、人忘れにけり。（八　276－9）（注4）

4　かいせうといふ人、法師になりて山にすむ間に、あらはひなどする人のなかりければ、親のもとに衣をなむあらひにおこせたりけるを、いかなるをりにかありけむ、むつかりて・・・（二七　287－12）

5　平中、にくからず思ふ若き女を、妻のもとに率て来ておきたりけり。にくげなることどもをいひて、妻つひに追ひいだしけり。この妻にしたがふにやありけむ、らうたしと思ひながらえとどめず。（六四　310－8）

6　また、としこ、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、来ざりけり。（六七　313－5）

7　御王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり。（七八　320－14）

8　故中務の宮の北の方、うせたまひてのち・・（中略）・・かの北の方の御おとうと九の君を、やがてえたまはむと、おぼしけるを、なにかは、親はらからともおぼしたりけるに、いかがありけむ、左兵衛の君、侍従にものしたまひけるころ、その御文もて来となむ聞きたまひける。（九四　332－3）

9　さて心づきなしとやおぼしけむ、もとの宮になむわたりたまひにける。（九四　332－5）（注5）

10　おなじ右のおほいどのの御息所、帝おはしまさずなりてのち式部卿の宮なむすみたてまつりたまうけるを、いかがありけむおはしまさざりけるころ・・・（九五　333－2）

11　さて来たりける夜も、えあふまじきことやありけむ、えあはざりければ、かへりにけり。（一〇九　355－7）

12　三条の右の大臣のむすめ、堤の中納言にあひはじめたまひけるあひだは、内蔵の助にて、内の殿上をなむしたまひける。女はあはむの心やなかりけむ、心もゆかずなむいますかりける。（一三五　367－5）（注6）

13　返し、上手なればよかりけめど、え聞かねば書かず。（一三五　367－10）

14　「世の中心憂し。なほ男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうやう思ひやつきけむ、この男の返りごとなどしてやりて・・・（一四一　373－12）

15　さてこの男は、くれ竹のよ長きを切りて、狩衣、袴、烏帽子帯とを入れて、弓、胡籙、太刀など入れてぞうづみける。いまひとりはおろかなる親にやありけむ、さもせずぞありける。（一四七　387－6）

16　さて返しはいかがしたりけむ、知らず。（一四八　394－7）

17　のちにはいかがなりにけむ、知らず。（一四八　394－11）

18　夜昼、これ（鹽－筆者注）をあづかりて、とりかひたまふほどに、いかがしたまひけむ、そらしたまひけり。（一五二　400－3）

19　むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。（一五五　403－5）

20　大和の国に、男女ありけり。年月かぎりなく思ひてすみけるを、いかがしけむ、女をえてけり。（一五八　408－4）

21　いもうと見つけて、あはれとや思ひけむ。（一六八　425－6）

22　いかなる心地しければか、さるわざしけむ、人にも知らせで車に乗りて内にまゐりにけり。（一七一　428－10）

これにたいして『伊勢物語』には「けむ」が二八例見られる。（注7）

先ず初めに使用頻度を『全集』のページ数当たりで概算してみると、『伊勢』三・六ページに一回、『大和』七・五ページに一回の割合となって、これで見るかぎり『大和』の語り手は『伊勢』の語り手のおよそ半分程しか表に姿を現わしていないということができよう。

続いて、『伊勢』との比較で目に付く事柄を二、三述べる。

二

第一に、「けむ」を用いて推量する場合、例2のように、別れた後も男が女をいとしく思って歌を送ったことについて「あくとしもなくてやみにしかばにやありけむ」、飽きて嫌になったために別れたというわけでもなかったからかと、具体的にその推量の内容を示す場合（一・A）もあれば、例19のように、大事に育てられていた娘を「いかでか見けむ」どうやって見たのかと、ただ単に疑問の言葉を添えるだけの場合（一・B）と、二通りの推量の仕方がある。全用例中に（一・B）の占める割合を調べると、『伊勢』は六例（注8）、二一・四％であるのに対して、『大和』は一〇例（4、7、8、10、16、17、18、19、20、22）四五・五％と、『大和』の方が倍くらい多いことが分かる。すなわち、『伊勢』ではかなり具体的に語り手の推量した内容が明示されたうえで「けむ」が用いられているのに比べて、『大和』の場合あまり具体性がなく、「いかが」とか「いかなる」とか疑問の言葉のみが記されている例が多いのが目立つ。

さらに、このような疑問の言葉が用いられた例について詳しく見てみると、両者にかなりの違いが伺えるのである。

『伊勢』の二段、五九段、七六段では、表現自体は確かに漠然としているけれども実際は、二段「どんなに《恋しく》思ったのか」五九段「どんなに《辛く》思ったのか」、七六段「どんなに《懐かしく恋しく》思ったか」と、語り手の推量の内容が分かる、言葉で表わされてはいないが読者にはそれと分かるようなものである。しかし『大和』では22を除いて、他の例はみな語り手も全く白紙の状態における、文字通りの疑問の形の推量である。特に7、16、17には「忘れにけり」「知らず」と、一応推量はしてみるが語り手自身それについて全く分からないということを明記しているほどである。すなわち、『伊勢』で「けむ」が用いられるときには語り手のほうにそれ相当の準備がある、言いかえれば、語り手としては読者にこのように理解してもらいたいということがはっきりあるのだけれども、それをこうだと断定してしまわずにこうではなかろうかと柔らかく推量の形で述べる、あるいは敢えて疑問の表現を使って読者に

考えてもらう、そうすることで読者を物語の世界により深く引き入れようとしている姿勢がうかがえる。『大和』ではそれとは異なりもっと単純な形での推量、語り手も読者と殆ど同じ地平に立ってのぼんやりとした推量の例が多く見られるということである。

そして、このことは、次に述べる推量の対象、つまり何について推量しているかという問題と密接に関連していると思われる。

三

「けむ」を考える第二の点として、語り手が推量していることの内容を見てみると、例9の「心づきなしとやおぼしけむ」のように登場人物の心中を推量する場合（二・A）と、例15の「いまひとりはおろかなる親にやありけむ」のような出来事・事柄について推量する場合（二・B）の二種類に分けられる。

『伊勢』で（二・A）の心情に対する推量は一八例あり（注9）全体の六四・三％を占めていて、このうち、「・・・とや思ひけむ」あるいは類似の「おぼす」などの、明らかに心情に対する推量であることの示された形のものが一三例もあるのに、『大和』で（二・A）は2、9、21、22の四例（一八・二％）、そのうち「思ひけむ」型は二例（9、21）しかない。『伊勢』では登場人物の心情に対する推量が多いのに比べて、『大和』では人間の心中よりも出来事・事柄に対するもののほうがはるかに多いのである。

加えて、『伊勢』の一八例のうちの一一例は和歌を詠む際の人物の心情に関するものであるのに、『大和』にはそのような例が全く見られないのも大きな違いであるといわなくてはならない。

たとえば先にも引いた『伊勢物語』第二段は、

・・（前略）・・かへり来て、いかが思ひけむ、時は三月のついたち雨そほふるにやりける。

おきもせず寝もせで夜を明かしては春のものとてながめくらしつ

で章段が終っているのであるが、この「いかが思ひけむ」は「おきもせず・・・」の歌に収斂されていくものである。逢瀬のあと一人になって余計に女のことが慕われてならない、どれほど恋しく思ったのか、歌を詠んで送ったと、章段末の和歌にむけて少しずつ話が盛り上がっていく、歌の直前の、その歌が詠まれるに至る事情のまさに最高潮のところに「けむ」が用いられているのである。

ところがこのような例は『大和』には一つも見当たらない。

これはすなわち、『伊勢』では登場人物の心情、とりわけその人物が歌を詠むときの心情に語り手の関心があるのに、『大和』の場合は過去の出来事・事柄の方に関心のあることの反映であると思われる。

甲斐氏が先の引用文中で述べておられたように、語り手の即しているはずの人物の心中についてあえて「いかが思ひけむ」と「異例な表現」をすることで、逆に読者を作中人物あるいは物語の世界に引き付け、クライマックスの和歌へ繋いでいこうとする『伊勢』のあり方と、例19「いかでか見けむ」見られるはずのない深窓のお嬢様を卑しい身分の男が一体どうやって見たのだろうと表現する『大和』のあり方との間には相当な開きがあると言わなくてはならないだろう。

このことが先に二で述べたことと関連するのだが、登場人物の心情についてなら語り手はどのようにも述べることができるし、わざと逃げて読者に下駄を預けかえって味わいを深めるということも可能だが、過去の事実についてでは、語り手といえども知らないことは書きようがないというのも或る意味では当然かもしれない。『源氏』の語り手が王命婦の手引きについて「逃げを打って」書かなかったのも、物語最大の重要場面であるからこそかえって効果的であ

ったわけだが、『大和』の場合はどうもそれとは比較にならない次元のことのようである。

また『大和』のこのような出来事・事柄に対する関心の深さは、時にかなり理屈っぽくまた一見無駄なような形で表わされる場合も見られる。たとえば例6は第六七段冒頭から、

また、としこ、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にやさはりけむ、来ざりけり。こぼれたる家にて、いといたくもりけり「雨のいたく降りしかば、えまゐらずなりにき。さるところにいかにものしたまへる」といへりければ・・・

とあるところだが、この「雨にやさはりけむ」の句は、あとの千兼からの便りの「雨のいたく降りにしかば、えまゐらずなりにき」と内容的には全く重複するもので、仮になくても一向構わないものである。文章の流れから言っても、「・・・千兼を待ちけるに、来ざりけり。こぼれたる家にて・・・」の方がすっきりしてよいと思われる方も多いのではなかろうか。

そのような語句をあえて『大和』の語り手が加えたのは、「千兼を待ちけり」と「来ざりけり」との間のミゾを言葉で埋めようとしたからではないのか。

例15でも、同じ時に同じ様にして死んだふたりの男の一方の親は立派な副葬品を揃えたのに、もう一方の親は何もしなかった、それはその親が「おろか」だったからではないかというひとことを加えている。

事柄と事柄とが矛盾していたり、いくらかずれていたりした時、『大和』の語り手はそのままほうって置くことができないようである。かなり理詰めに事柄と事柄とを言葉で繋いでいこうとする、このような『大和』の語り手の態度は、ほかにも、例1、5、10、11、12、14、18、19、20といくらも見られるものである。

このなかで特に19については、小堀桂一郎氏が

〈いかでかみけむ、・・・みてけり〉と〈見〉の反復には力がある。何故かはしらぬが、とにかく見たことは見てしまったのだ！、といった語気である。

と述べておられる（注10）。語の繰り返しによって結果的にある種の語気が添えられたという点は確かに否定できないとしても、これは語り手が初めから意図したことではなかったのではないか。内舎人のような身分の低い男が、入内を望まれている娘を見るなどということの普通ならおよそ不可能であることに対する素朴な疑問、恐らく読者もここで全く同じことを考えるであろうその疑問をそのまま記したものとする方が良いのではないだろうか。

ともかくこのような語句は、人によっては不要のもの、語り手の無駄なおしゃべりで、かえって物語の流れを断ち切り物語自体を底の浅いものにしていると思われるむきもあるかもしれない。しかしこれらは柿本奨氏言われるところの「合理を求める精神の所産」（注11）であり、『大和』の語り手にとってはやはり必要だったことで、これがまた『伊勢』とは異なる『大和』の独自性を成すものと考えられるのである。

四

次に『大和』と『伊勢』との語り手の姿勢の違いを象徴的に表わしていると思われる例として、『大和物語』の一六一段を取り上げてみる。周知のとおり『伊勢』と共通する内容をもった章段は『大和』に七段ある（注12）が、そのいずれにも「けむ」は用いられていない。関連の『伊勢』の各章段の文章にも「けむ」は一例しか見られず、そのただ一つの例が七六段にある。『大和』一六一段は前半が『伊勢』の三段と、後半が七六段とほぼ同じ話で、両物語の比較研究にはしばしば素材とされているところでもあるのだが、以上

のような理由で「けむ」を考えるに際してはどうしても避けられない章段である。

『大和物語』第一六一段

在中将、二条の后の宮、まだ、帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける世に、よばひたてまつりける時、ひじきといふ物をおこせて、かくなむ、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつつも

となむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。

さて、后の宮、春宮の女御と聞えて大原野にまうでたまひけり。御ともに上達部・殿上人、いとおほく仕うまつりけり。在中将も仕うまつれり。御車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。御社にて、おほかたの人々禄たまはりてのちなりけり。御車のしりより、奉れる御単衣の御衣をかづけさせたまへりけり。在中将、たまはるままに、

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめと、しのびやかにいひけり。むかしをおぼしいでて、をかしとおぼしける。

『伊勢物語』第三段

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつつも

二条の后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。

『伊勢物語』第七六段

むかし、二条の后の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひけるおきな、人人の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもいいづらめとて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし。

これらの章段の関係については、はやくに今井源衛氏が、『伊勢』を素材に『大和』が合成し、「後半では、むしろ意識的に伊勢に反する形を工夫した」こと、「細かい描写の度は大和がはるかにまさっている」ものの、結末の違いから「大和の作者はやはり伊勢物語のそれに比べて幼かったというほかはない」と記しておられる（注13）。

今井氏が、「伊勢のような結末こそ」「二首の歌を頂点とする男の恋情を描いた」内容に「ふさわしい」といわれた、その結末の部分を比べてみると、『伊勢』七六段の末尾の文には「けむ」が二度繰り返して用いられている。確かに「大原や」の歌を詠んだ主人公の心中について、「心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ」と畳み込んでいく表現で読者を引き付け、「知らずかし」と余情を残すことで印象的な結末になっているということができよう。歌を詠む主人公の心中について具体的に推量しているという点において既に述べて来たような『伊勢』の「けむ」の典型と言えるものでもある。一文中に二度「けむ」が使われている例は、『伊勢』『大和』両物語を通じてもここ一か所のみであり、そのことだけでもかなり特殊な表現であるのだが、さらにその効果という点で、この「けむ」は重要な役割を果たしているものと思われる。

ところが、『大和』一六一段には「けむ」は全く見られない。

この問題について今井氏は、

伊勢の「いかが思ひけん、知らずかし」は、大和では、前半の末尾に移されて「かへしを人なむわすれにける」となったらしい。

としておられるが、これについては柳田忠則氏が、

「かへしを、人なむ忘れにける」という本文は二条后の返し歌について説明しているものであり、たとえ、返し歌の有無が現在はっきりしないにしても、彼女を少しでも注目させようとしたのであろう。・・（中略）・・むしろこれは伊勢物語の「心にもかなしとや思ひけん、いかゞ思ひけん、知らずかし」が大和物語の「しのびやかにいひけり」となっているのであって・・・

と反論された（注14）。

ここは柳田氏の言われる通り、『伊勢』七六段の末尾文が『大和』前半の末尾になったのでなく、「人なむ忘れにける」は『伊勢』の第三段に二条の后の返歌のないことについて『大和』の語り手が単に断わったものであろう。『大和』の語り手が返歌があってしかるべきとき、当然返歌があったであろうのにそれを記すことができないときに、一々断りを述べているのは全体を通じて見られる傾向であって、八段（例1）、四五段、七八段（例7）、九五段、一二〇段、一三四段、一三五段（例13）、一四八段（例16）と同じような内容のものが幾つも拾えることからもそのことは伺えるのである。

『伊勢』の「心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし」が『大和』では「しのびやかにいひけり」に変わり、さらに「むかしをおぼしいでて・・・」の文が付け加えられたことで、『伊勢』の語り手の関心があくまで男の心境にあるのに対して、『大和』の場合はそうではないことが明らかになっていよう。柳田氏は『大和』では「二条の后の方に中心が置かれている」と述べておられるが、私は『大和』の語り手の目は歌をめぐる人物ふたりに等分に注がれているのではないかと思っている。言い換えれば、『伊勢』は歌を詠んだ人物が中心で、どのような人物がどのような時にその歌を詠んだかに重点があるのに対して、『大和』では歌にまつわる事柄そのものが主人公であると考えられ、どのような状況で歌が詠まれたかは勿論のこと、歌を受け取った人物の反応まで含めた『伊勢』よりかなり広い範囲に興味をもって書き記しているということではないだろうか。そのために、『伊勢』ではあくまで男の心情が大切にされ余韻をもって物語を終えているのに、『大和』は心情については男に関して「しのびやかに」と表現するだけ、女についても「をかしとおぼしけり」とあるだけでいたって「簡略に」（注15）され、そのかわりに、「なま暗きをりに立てりけり」とか、「御衣をかづけさせたまへりけり」とか細かい事柄、見方によっては「余分なこと」「いささか作りごとが過ぎる」（注16）と言われるようなことまで書いてしまうのであろう。

これはこの章段だけに見られることではなく、本稿でこれまで述べてきた「けむ」をめぐることどもにも共通して、『大和物語』そのものの特質がここに現われていると考えられるのである。

『大和』の「けむ」を『伊勢』と比べてみて明らかになったのは『伊勢』では登場人物の心情についてかなり具体的に推量し、そのことで読者を人物、あるいは物語世界により引き付けようとする例が多いのにたいして、『大和』の場合は、まず使用例が少ないこと過去の出来事・事柄について物語の記述をできるだけ矛盾なく、筋が通るように進めていくための推量の例が多いこと、さらに、一応筋が通れば良いわけだから推量の内容は特に具体性がなくても、語り手も無頓着ではないということが示されれば十分で、読者にとっては時にありがた迷惑のようなものもないではない、ということであった。

これは取りも直さず『大和』『伊勢』それぞれの語り手の関心のあり方の違い、『伊勢』では人物の、とりわけ歌を詠むときの人物の心情に重点が置かれているのに、『大和』では歌をめぐる事柄の方に中心があるというところから来たものであると思われる。

そして以上のことははやくに阿部俊子氏が、

伊勢物語では、話の中心が、歌を詠んだ場合の対人関係、事情雰囲気の説明におかれて、歌をよんだ人の、その歌をよむ時の気持の動きを盛り上げているのに対して、大和物語の方は、このような事柄に対して、このような歌をよんだらこうだった、というように客観的・解説的で事後に説明をするとでもいうような立場をとって書かれているものが多い。

と述べられたこと（注17）、さらには山口仲美氏が現在形文末表現を調査して、『伊勢』の「作者が、歌そのものに最大の関心をもっていたということ」「一方、大和物語の作者は・・（中略）・・歌よりも事件そのものの経過により多くの興味関心をもっていた」と結論された（注18）こととも一致するのである。

そして両物語のこのような違いは、独り語り手の関心のありどころの違いだけでなく読者層の違い、すなわち、語り手の書かなかったことをも十分に読み込むことができ人情を深く味わう下地のある読者と、書かれたことのみを受け取り事実に対する興味の旺盛な読者との違いといったようなものを反映していると思われるのである。

おわりに

以上『大和物語』の「けむ」をめぐって、『伊勢物語』と比較しながら述べてきた。既に指摘されている『大和』『伊勢』の性格の違いが、助動詞「けむ」の用いられ方の上にも現われていたということになろう。

残された問題も多いが、すべて今後の課題としたい。

注

1 「若紫巻を読む　一六　藤壷の宮との逢瀬」（日本語学一九八七・三）

2 より正確にはいわゆる「草子地」にあたるところであろうが、地の文と草子地の区別は厳密には難しく問題もあるのでここでは地の文と言っておく。

3 本文は『日本古典文学全集　竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』（小学館　一九七二・一二）による。引用のあとの括弧内、漢数字は章段の数、アラビア数字は底本のページ数・行数を示す。

4 底本と同じ二条家本系統の諸本のうち、宮内庁書陵部蔵本はこの一文を欠く。

5 8・9の例文は九四段で連続している。

6 二条家本系統の諸本のうち天福本は、「けむ」の部分が「ける」となっている。

7 紙数の関係から全てを引用することができないので、小学館本での該当箇所のみ記す。

1（一　133－3）　2（二　134－8）　3（八　139－9）　4（一四　146－3）　5（一四　146－7）　6（二一　152－7）　7（二一　153－8）　8（二二　154－9）　9（三一　162－7）　10（三二　163－4）　11（三七　165－4）　12（四五　172－4）　13（五九　180－8）　14（六二　182－3）　15（六四　185－7）　16（七六　197－11）　17（七六　197－11）　18（七七　199－1）　19（八六　208－12）　20（八七　210－11）　21（九〇　212－9）　22（九三　214

1-1）23（九三 214-5）24（九四 214-7）25（九六 216-5）26（一〇三 221-13）27（一〇四 222-7）28（一二三 233-5）

8 例2、6、13、15、17、24。

9 例1、2、3、4、5、7、8、9、10、11、13、16、17、19、21、25、27、28。

10 「『大和物語』―安積香山の歌―」（『文章の解釈―本文分析の方法―』東京大学出版会 一九七七・一一所収）

11 「事実と物語―大和物語の記述―」（国語と国文学 一九七七・一二）

12 一四九、一六一～一六六の諸段。

13 「大和物語評釈 五〇 在中将」（国文学 一九六六・一〇） なお、『伊勢』の三段と七六段をもとに『大和』が作られたとするのが通説でここではそれに従うが、たとえば吉山裕樹氏などは諸本間の異同や成立事情とからめてかなり複雑な影響関係を考えておられるようである（「大和物語における在中将・二条后説話と伊勢物語」（広島大学文学部紀要 第三九巻 一九七九・一二））。この問題については別の機会に考えてみたいと思っている。

14 「大和物語における在原業平関係章段について」（解釈 一九七八・四）

15 柳田氏、注14。

16 今井氏、注13。

17 「大和物語の解釈と文法上の問題点」（『講座解釈と文法 4』明治書院 一九六〇・五）

18 「伊勢・大和・平中の文末表現」（『平安文学の文体の研究』明治書院 一九八三・二）初出は一九七六・五。

―― 鹿児島女子短期大学講師 ――